

東京歴史科学研究会編 『人民の歴史学』 第197号、2013年9月

特集 歴史教科書で災害史を —古代から現代まで— どうとりあげるか

いま、私たちは、否応もなく「災害」と真正面から向き合わざるをえません。こうした状況のなかで、歴史教育・歴史研究は何をすべきなのでしょうか。

本特集は、2011年6月に開催されたシンポジウム「歴史教科書いままでとこれから PARTⅧ」で、東京歴史科学研究会ワーキンググループがおこなった報告を元にしたものです。掲載された7本の論文では、①歴史教科書（主に高校日本史）で災害史がどのようにとりあげられているのか、その問題点はどこにあるのかについて分析したうえで、②歴史研究の成果を踏まえて、歴史教科書・歴史教育実践で災害史をどのようにとりあげるのかについて、提起しました。

この特集が、歴史教育と災害史をめぐる議論、そして実践が活性化する契機となれば、幸いです。

* 『人民の歴史学』 第197号の目次

特集Ⅰ：「生存の危機」と人びとの主体性

＜東京歴史科学研究会第47回大会委員会企画＞

自助と自浄の一九世紀—暴力という主体的行為の記憶— 須田努

敗戦前後における労働者統合 佐々木啓

コメント—「生存」をめぐる中近世移行期研究— 長谷川裕子

討論要旨 北浦康孝・鈴木淳世

特集Ⅱ：歴史教科書で災害史をどうとりあげるか—古代から現代まで—

＜シンポジウム歴史教科書 いままでとこれから PARTⅧ＞

特集によせて 中嶋久人

歴史教育で災害史をとりあげる視点 加藤圭木

古代・中世の教科書災害史記述の現状と歴史学習への視点 小坂望

教科書における近世災害史叙述の問題点 田中元暁

高等学校歴史教科書における近現代史の災害記述の比較検討 雨宮史樹

歴史教育における災害と物語—「稲むらの火」をめぐる— 大堀宙

関東大震災の授業を充実させるために 井上直子

〈災害で学ぶ／教える〉ことの可能性—初期社会科教科書における問題解決学習の
実践から— 小山亮

＜書評＞

田崎宣義編著『近代日本の都市と農村—激動の1910—50年代』 荒川章二

＜文献紹介＞

井上祐子著『日清・日露戦争と写真報道』 茂木謙之介

吉田裕著『現代歴史学と軍事史研究—その新たな可能性』 山口隆行

＜東京歴史科学研究会活動の記録＞

三月例会参加記 小志戸前宏茂

* 価格は900円+送料です。氏名、住所、電話番号、冊数を明記のうえメールでご注文ください。メール：torekiken@gmail.com ウェブ：http://www.torekiken.org/